

高等教育自学考试
日语专业指定教材

(修订版)

上级上册

大学日本语

山本哲也 正木好弘 嘎日迪 编著

DAXUERIBENYU

大连出版社

高等教育自学考试
日语专业指定教材

大学日本语

(修订版)

上级 上册

山本哲也
正木好弘 编著
嘎日迪

大连出版社

大连外国语学院日语专业教材编委会

主任:徐甲申

顾问:刘和民

编委:蔡全胜 陈 岩

大学日本语(修订版)上级 上册

山本哲也 正木好弘 嘎日迪 编著

责任编辑:张 波

策划编辑:孙德彦

封面设计:曹 艺

责任校对:金 琦

出 版 者:大连出版社

地址:大连市西岗区区长白街12号

邮编:116011

电话:0411-3621147

印 刷 者:丹东印刷有限责任公司

发 行 者:各地新华书店

幅面尺寸:140毫米×203毫米

印 张:11.25

字 数:220千字

出版时间:2004年2月第2版

印刷时间:2004年2月第1次印刷

印 数:1-5000

ISBN 7-80555-835-3/C·254

定 价:36.00元(上、下册)

修订版前言

《大学日本语》(上级上、下册)出版发行以来,不觉间十易寒暑。蒙同行及广大学习者的厚爱,它不仅一直为大学本科教学所使用,还被指定为辽宁省日语专业自学考试教材。

为了使之更好地为广大读者服务,编者根据多年的使用情况,感到有必要进一步完善本教材。此次在大连出版社大力支持与关怀下,本教材终于得以重新修订出版,实现了编者多年的宿愿,这对编者无疑是一件欣慰的好事。

考虑到广大自学考试学员学习上的特点和作为自学考试教材的连续性问题,此次修订时,在保留本教材本身的编写方针和课文内容的前提下,对课文中出现的一些难以理解或查找的词句,作了较多的改动或补充。每篇课文新设了文法与句型一栏,并在书后附加了文法·句型索引和辽宁省高等教育自学考试日语精读(一)(二)考试大纲及其考试题例。另外,在版式,装帧设计等方面也加以修改,力求该书从内容到形式更加完美。

参加本书修订的还有包海明、于丹、张艳萍、杜红坡、李晓东、徐晓、洋洋等。

由于水平所限,本书难免有不足之处,敬请广大读者多提宝贵意见。

编者

2004年1月于大连

前書き

『大学日本語・上級』では、日本語の基礎学習を終えた学習者が日本語の用例をたくさん知ることを目的としている。しかし、従来のテキストは、その目的に十分かなっているとは思えなかった。本テキストは、その点を改め、その本来の目的にかなったものを提供しようとするものである。

出来上がったものは、従来のテキストにはない斬新さをそなえたものになっていると自負している。従来のような日本の中学や高校の「国語」の教科書からの抜粋ではなく、対象をもっと広げ、本当に望まれるものを載せるように心がけた。実学教材の収載も、現代のニーズを念頭に置いたものである。小説の選定にあたっては、まず新しいものをと考えた。そのうえで、現代日本語を学び、現代日本の理解を助ける作品を採用するようにした。

中国での日本語教育は今や新しい段階を迎えた。そういうべき段階に達していると判断している。本テキストでの試みが大方に歓迎され、中国における日本語学習の質的転換を生じさせる一つの機縁となればと望んでいる。

本テキスト編纂にあたり、御協力いただいた方々に感謝申し上げます。また、さらにより良い日本語教育実現の為に御意見・御感想をお聞かせ下されば幸いです。

编者

目 次

1. ドラマ	1
愛という名のもとに	野島伸司 2
大予言	浜田金広 55
2. 社会と人間	78
タテ社会の人間関係	中根千枝 79
「である」ことと「する」こと	丸山真男 96
3. 日本語	112
日本語の特質	金田一春彦 113
どうも	林屋辰三郎、梅棹忠夫 多田道太郎、加藤秀俊 149
4. 数学と物理	160
方程式	161
物理の公式が教えてくれる力の出し方	神津カンナ 175
[講座①]日本の詩歌	181
短歌	182
俳句	183
流行歌	183
5. 小説	187
三月の風	阿部 昭 188
〇〇についてどう思いますか	清水義範 213
6. 証明と論理	241
証明	242
春風と桶屋	山下正男 252

7. 生物に学ぶ	264
アベコベガエルは「引き算」思考	飛岡 健 265
三人の先生のお話	山田太一 280
8. 企業の世界	294
松下式ソケットの考案	豊沢豊雄 295
付: 実用新案出願書類の形式	
二通のテレックス	313
[講座②] 古典	330
古文	329
漢文	326
附录 1	
文法・句型索引	331
附录 2	
辽宁省高等教育自学考试日语精读(一)(二)考试大纲	336

1. ドラマ

〈単元のねらい〉

1・2 学年での会話中心の学習をふまえ、抵抗なくかつまた興味を持って学習に取り組むことが出来る教材として、テレビドラマを取りあげた。まずその作品世界を楽しんでほしい。特に「愛という名のもとに」の主人公達は学習者と非常に近い世代である。その主人公達の会話によって、現代日本の青年の会話がどんなものであるかをつかんでほしい。この作品は12回の連続ものの第1回のみを取り上げたが、他の回もビデオで鑑賞し、主要な7人の登場人物が、それぞれの回ごとにどのような行動をしたのかを簡単にまとめてみることもしてほしい。「大予言」は『世にも奇妙な物語』というシリーズ中の一編である。「愛という名のもとに」は連続ドラマであったが、こちらは短いがこれで一つの話として完結しているものである。短編の切れ味を楽しんでほしい。「愛という名のもとに」はどちらかというと仲間同士の会話を中心としたドラマであったが、こちらは案内役のタモリ、テレビの司会者、レポーターなどの言葉づかいによって、パブリックスピーキングの確認をしてほしい。

愛という名のもとに

野島 伸司

1. 戸田ボート場

ボート場の水面

○タイトル「1988・秋」

水しぶきをあげるオール。大学対抗のレガッタが行なわれている。コース脇を自転車に乗り応援する尚美。

尚美:「ファイト! いけ!」

自転車を降り、貴子の所へ。

貴子:「いったいどうなってんの」

尚美:「半艇身負けてる」

貴子:「ほんと」

競うボート

尚美:「ガンバレ!」

則子:「これが最後だからね」

ゴール間近。高月健吾、神野時男、塚原純、倉田篤の四人、必死にボートを漕ぐ。コースにそって斎藤尚美、藤木貴子、飯盛則子が走りながら自大学に声援を送っている。一進一退を繰り返していたレースも、次第に健吾達の文京大学が引き離してゴールする。歓喜して抱き合う貴子達。手をあげガッツポーズの健吾達。全日本学生ボート選手権の優勝カップ。それを受け取る表彰台の健吾。監督の胴上げ。

N :「誰もがそれぞれの思いで、知り合ってから四年間を

回想していた」

2. レガッタ

健吾:「せえの、乾杯!」

一同が歓声をあげてジョッキを勢いよくかかげ飲む。

N :「そして、この最後の祭りを出来るだけ引き伸ばそう
と、意味のないことでふざけてハシヤイだ」

ビールを飲む学生をたどり健吾へ。

N :「正義感が強く、部のキャプテンの健吾」

泣いている則子。尚美が慰めている。

N :「感激屋で泣き虫の則子」

輪になって肩を組み歌う学生達。

ピアノ伴奏をしながら歌う純。

N :「いつも冷静で、仲間のアナライザーだった純」

輪の中で歌う尚美。

N :「一年から雑誌のモデルをしていて、男子部員のお姫様
である尚美」

ビールを飲む篤。

N :「合宿所を逃げ出してしまう、みんなで探しに行ったチ
ョロこと篤」

尚美と話しながら煙草をくゆらす時男。

N :「そして……、結局部費を四年間払わなかった時男」

文京大学ボート部の同窓七人の仲間が集まっている。

N :「部の中でいつも一緒だったあたし達七人。誰かが話し
始めると、決まって帰るのは朝方だった……」

3. 同・表

時男がビールを片手に、ホロ酔い気分で風にあたってい

る。

貴子:「時男」

時男:「(チラッと振り返り)ん!」

貴子:「(背中から)就職どうすんのよ?」

時男:「(苦笑して)その前に卒業も危ういよ。フン」

貴子:「はい」

と、後ろ手から分厚い原稿用紙を差し出す。

時男:「……」

貴子:「卒論」

時男:「……」

貴子:「フフ、字、ワザと下手に書いたから」

時男:「……貴子」

貴子:「ん?」

時男、フラッともたれるように貴子を抱き締める。

時男:「俺と結婚しよう」

貴子:「……」

時男:「一緒にアメリカへ行こう」

貴子:「……(不意に吹き出し)またすぐバレる冗談言って」

と、引き離す。

時男:「……」

貴子:「あたしだからいいけど、他の子だったら真に受けちゃうからね」

と、ブツ真似をする。

時男:「(よける仕草で)ハハ、やつぱバレた?」

貴子:「当たり前よ。就職も決まってない人が言うこと本気にするワケないでしょ」

時男:「当たり前。ジョークだよ。ジョーク。ジャストジョークさ」

不意に他の部員たちがドッと出て来て、時男を強引に店員に連れ戻す。

部員:「あ、いたいた」

篤:「腕相撲やろう、腕相撲。健吾が待ってる」

4. 同・店内

手が組み合わされる。その組み合わされた二つの手に貴子は自分の手を重ね

貴子:「レディー、ゴー(とはなす)」

健吾と時男、腕相撲を始める。

尚美:「ねえ、ねえ、ねえ、貴子はどっちの応援するのよ?」

貴子:「え?」

尚美:「この際ハッキリ決めなさいよ」

周囲も面白がって揶揄する。

健吾:「……」

時男:「……」

貴子:「……二人とも頑張れ!」

5. 川の流れ(明け方)

しらじらと夜が明けていく。

6. 艇庫

時男たちが酔いつぶれてシャガミ込んで眠っている。

貴子と健吾は、ボンヤリと艇を思い出深く見つめている。

健吾:「今何時だ?」

貴子:「(腕時計見て)……んー、5時半」

健吾:「……貴子」

貴子:「うん?」

健吾:「卒業したらさ……俺たち」

時男:「(不意にモサッと)祭りは終わったな」

貴子:「起きてたの?」

時男:「(健吾に)ビールくれ」

健吾:「(苦笑しながら投げ)バカ、今いいとこなんだ。も
チョット寝てろ」

時男:「(ビールを開けて)ハハ、お生憎様」

貴子:「けど、ホントあつという間の四年間だったね」

健吾:「最初に部に入ったのは貴子だったんだよな」

貴子:「女はマネージャーしかなくてガッカリだったの」

時男:「(健吾に)俺なんかさ、カレー食ってたんだ、学食で。そ
したらよ、いきなり、こいつに声かけられてさ。そりゃ
オマエ、田舎から出てきたばっかで心細_えとこだからよ、
“電話してね”なんて優しく言われちゃって、フンで嬉し
くなっちゃって、そこへ電話したらさ、ヤローの図太え声
で」

健吾:「(笑って)はい、ボート部です」

貴子:「フフ」

時男:「オマエ、そりゃサギだぜ」

貴子:「変な下心があるから悪いんじゃない。男ってヤーね」

時男:「俺はしばらく人間不信になっちゃったよ」

健吾:「けどよ、今は良かったろ」

時男:「……(うなずき)ああ、いい仲間に会えたよ」

貴子:「……(寝ている他の者を見る)」

健吾:「どれだけ歩いたら、人として認めて貰えるのだろう」

時男:「いくつの海を越えたら、白いハトは砂地でやすらげる
のか」

貴子:「友よ、その答は風に吹かれている」

貴子・健吾・時男:「答は風に吹かれている」

三人、忍び笑いで……。

健吾:「(他の四人に)おい、オマエら起きろ。帰るぞ」

笑顔の貴子。

N :「今思えば、この日が時男を見た最後でもあった」

7. 同・表

一同が艇庫のシャッターを持っている。

篤 :「これでホントに終わっちゃうんだなあ」

健吾:「バカヤロ、情けねえ声出すな」

則子:「卒業してもさ、みんなしょっちゅう会えるよね。(半べソをかいてしまう)」

尚美:「あーあ、ノリはすうぐ泣くう」

則子:「だって……」

貴子:「(肩をゆすり)よしよし」

健吾:「時男、チャンと持てよ」

時男:「(ビール片手に適当に持ち)はいはい」

篤 :「俺は社会になんか出たくねえよ」

純 :「チョロ、いつまでもゴネてんなよ」

則子:「あたし達は変わらないよね」

貴子:「当たり前よ」

時男:「世の中にゃ、変わらないものだってあるんだよ」

純 :「ああ」

尚美:「仲間だもん」

篤 :「絶対変わらない」

健吾:「それじゃあボート部恒例の儀式により……」

一同:「解散」

大人への境界線を引かれたように、シャッターが軋みな

がら閉められていく。

○メインタイトル

『愛という名のもとに』

8. ~高等学校・校庭

無人のアスファルトの校庭

○タイトル「1991. 秋」

9. 同・二年 A 組

貴子(25)が教壇に立って授業をしている。

一見して進学校と分かる生徒達が、一心不乱にノートを取っている。

N: 「三年が経ち、あたし達はそれぞれ社会に出て働いている。あの頃の仲間とも今では連絡が途絶えがちになっていた。時々、何か大事な事を忘れてしまったような気がするけど、日常生活に埋没して、それが何なのか思い出せずにいた」

10. 浜辺

コートを着た貴子と健吾が歩いている。

貴子:「どう? 代議士秘書になった感想は」

健吾:「まだよく分からないよ。社にいた時とは全然勝手が違うからな」

貴子:「でも目がキラキラしてる」

健吾:「(苦笑して)からかうなよ」

貴子:「からかってなんか……ボート漕いでた時みたい。いきいきしてるって思ったの」

健吾:「……貴子」

貴子:「うん?」

健吾:「俺達は付き合いだして三年になる」

貴子:「(短く回想して)うん。そうだね」

健吾:「色々考えたんだけど」

貴子:「……」

二人、しばらく黙って歩く。

健吾:「結婚しよう」

貴子:「……」

健吾:「俺達結婚しよう」

貴子:「……(小さく)本気?」

健吾:「俺がそんなジョーク言うかよ」

貴子:「……」

健吾:「……(答えを待つ)」

貴子:「あたしの理想は健吾と違うの」

健吾:「俺じゃ不服か? 末は代議士夫人だぜ」

貴子:「あたしの理想は、健吾と360度違うタイプよ」

健吾:「……(落胆するが、少し考えて)えっ、360度?」

貴子:「(微笑む)」

健吾:「……じゃ?」

貴子:「(うなずく)」

健吾、奇声を発して貴子を抱き上げる。

貴子:「チョット、チョット、やめてよ」

幸せそうな二人。

N :「一瞬、時男の顔が頭の中をよぎっていった。もうあの頃と違うあたしがいた」

11. 猪股家・表

古い門構えの一軒家に、コートを手にして喪服を着た甲問客たちが三々五々庭の中に入っていく。

文京大学漕艇部を中心に関係者からの花輪が多数並べられて、故人の人徳が窺われる。

12. 同・中庭

居間に設けられた祭壇の上に、白髪交じりの厳格そうな故人の写真が飾られている。入り切らない甲問客達が中庭に溢れている。その中に貴子と健吾もいる。OB会の代表者らしい男が、マイクを持って故人の冥福を祈っている。

OB会の男「文京大学OB会を代表いたしまして、亡き猪股先生の御霊に弔辞を捧げたいと存じます。猪股先生は我が文京大学ボート部全員にとって、かけがえのない第二の父親でありました。先生はとりわけ最近の教育問題には、心を痛めておられ、……」しんみりとしたその場の空気を破るように、“貴子”と大きな声を出して則子が来て、貴子の肩をたたく。

貴子:「ノリ」

則子:「ヤダ、ひっしきぶりイ」

貴子:「ホント、」

健吾:「(周囲を気にして)シィ」

貴子、則子、バツ悪く苦笑し、小声でヒソヒソ話し出す。

則子:「尚美は?」

貴子:「何度かけても留守電」

則子:「売れっ子みたいよね。モアとかウィズとかによく出たんだよね」

後ろで咳払いをする人がいる。そちらに頭を下げる二